

著者一覧（執筆順）

ルイ ソロ・マルティネル (Louis Solo MARTINEL)

ハーンが 1887 年から 1889 年に訪れたフランス語圏カリブのマルチニク生まれ。比較文学・英語・演劇・女性学および外国語としてのフランス語専攻。フランス国民教育省職員を務めたのち、数々の日本の大学で教鞭をとる。早稲田大学非常勤講師。現在はハーンの生涯と作品およびその他の作家に関心を抱く。最近の著作として、『クレオール物語』（イビス・ルージュ社、2001 年）、ハーンの幻想物語における文化横断性と越境性（ハーン没後 110 年シンポジウム、2014 年、レフカダ・ギリシア）などがある。

オード・デリュエル (Aude DÉRUELLE)

オルレアン大学人文学部教授。19 世紀フランス文学専攻。19 世紀フランス文学およびロマン主義研究会代表幹事。バルザックに関する著作を多数発表（『バルザックと逸脱』（仏語）クリスチャン・ピロ、2004 年や『コロネル・シャベール』（解説、仏語）、ガリマール・フォリオテック、2007 年など）。最近では歴史記述に関心を寄せ、オーギュスタン・ティエリのフランス史についての書簡（ガルニエ、2012 年）やジャン＝マリー・ルランとの共監修で、『フランス革命の小説（1790 年～1912 年）』（アルマン・コラン、2014 年）を発表している。

クリストフ・ガラベ (Christophe GARRABET)

大阪大学大学院言語文化研究科特任准教授。パリ東大学（マルヌ・ラ・ヴァレ）LISAA（文学、知、芸術）研究所メンバー。十九世紀における文学と科学、とりわけ通俗科学との関係を専門分野としている。カミーユ・フラマリオンについては、博士準備課程（DEA）論文の対象として扱った。日本では「カミーユ・フラマリオンにおける女性、身体とイメージ——知の伝播という感覚哲学」（『フランス語フランス文学研究』、日本フランス語フランス文学会、第 102 号、2013 年 3 月）を発表している。

結城 史郎 (Shiro YUKI)

富山大学人文学部英米言語文化講座准教授。富山大学ヘルン（小泉八雲）研究会メンバー。2015 年に、ダブリン・シティ大学にてラフカディオ・ハーンと日本に関する講演を行った。

小谷 瑛輔 (KOTANI Eisuke)

富山大学人文学部准教授。富山大学ヘルン（小泉八雲）研究会メンバー。日本近代文学。芥川龍之介が専門で、日本近代文学におけるラフカディオ・ハーンを受容に関心を抱いている。近年の関連著作として、「注釈」（芥川龍之介『侏儒の言葉』文春文庫、2014 年）などがある。

水野 真理子 (Mariko MIZUNO)

富山大学医学部准教授。専門は日系アメリカ人文学。著書に、『日系アメリカ人の文学活動の歴史の変遷—1880年代から1980年代にかけて—』、風間書房、2013年、「日系二世の日本留学と異文化理解の過程—メアリ・キモト・トミタ『ミエへの手紙』より—」、『来日留学生体験—北米・アジア出身者の1930年代—』所収、不二出版、2012年、などがある。

真鍋 晶子 (Akiko MANABE)

京都大学文学研究科英語学英米文学専攻修士課程修了。現在、滋賀大学教授。アイルランド、アメリカのモダニズム詩と劇を、エズラ・パウンド、および、彼を中心とする文学者 (W.B. イェイツ、アーネスト・ヘミングウェイなど) を核に研究。言葉の持つ音楽性に常に興味を持つ。最近は、日本の欧米モダニズムへの影響、特に、能楽との関係を深め、国際パウンド協会大会、国際イェイツ大会など国内外で学会発表。関連著書『ヘミングウェイとパウンドのヴェネツィア』、論文「パウンド、イェイツ、ヘミングウェイの日本との邂逅：狂言とヘミングウェイの詩をめぐって」など。

梁川 英俊 (Hidetoshi YANAGAWA)

鹿児島大学法文学部教授。フランス・ブルターニュ地方を中心とするケルト諸地域の言語・歴史・文化を主要な研究対象とする一方で、東西の音楽文化にも関心を寄せ、ブルターニュの伝統歌謡のほか、奄美島唄、韓国・全羅道の民謡等の調査・研究を進める。また鹿児島大学国際島嶼教育研究センター兼務教員として、南西諸島、奄美群島、韓国・多島海、ミクロネシア、ポリネシア等の島嶼地域の調査・研究にも携わっている。著書に『〈辺境〉の文化論—ケルトに学ぶ地域文化振興』(編著、2011年、三元社)、『歌は地域を救えるか—伝統歌謡の継承と地域の創造』(編著、2013年、三元社)、*Identité et société de Plougastel à Okinawa*, Presses universitaires de Rennes, 2007(共著) などがある。

西田谷 洋 (Hiroshi NISHITAYA)

富山大学人間発達科学部教授。富山大学ヘルン (小泉八雲) 研究会メンバー。専門は日本近代文学であり、ハーンの文学評論関係の仕事についていずれ考えてみたい。近年の仕事として『ファンタジーのイデオロギー』『テキストの修辞学』がある。

山本 孝一 (Koichi YAMAMOTO)

2012年富山大学人文学部定年退職、現在、富山大学名誉教授 (ドイツ文学、主としてヘルマン・ヘッセ研究)。定年数年前から留学生対象の教養科目「日本事情」を担当し、明治期の西洋人が見た日本人像をテーマとして講義を重ねるうち、他の誰よりも日本に傾倒したハーンの著作中に今は失われた、あるいは失われつつある日本人の古き良き姿が描かれていることに気づいた。今後はさらにヘルン文庫の調査を継続してハーン理解を深めていきたいと思っている。

鈴木 暁世 (Akiyo SUZUKI)

金沢大学人文学類准教授。専門は日本近代文学、比較文学。日本近代文学におけるアイルランド文学の受容と相互影響関係について関心を抱いている。著書に『越境する想像力 日本近代文学とアイルランド』がある。

濱田 明 (Akira HAMADA)

熊本大学文学部教授。熊本大学ハーン研究会メンバー。専門の16世紀フランス文学に加え、熊本で教鞭をとった漱石・ハーンについての研究も行っている。ハーンについては、「20世紀初頭におけるハーンの受容」(日本語、仏語)、「ハーンとフランス文学」(仏語)などの論文を発表している。

長岡 真吾 (Shingo NAGAOKA)

島根大学法文学部教授(文化交流論)。八雲会会員。島根県出雲市出身であることもあり、幼少時から小泉八雲の作品に親しむ。2014年ギリシア・レフカダ島で開催されたシンポジウムではコーディネータとパネリストを務め、ハーンのアイデンティティの重層性について発表する。同プロシードィングズ共編者。関連著作に「ラフカディオ・ハーンの眼----ハーンの視力と言葉をめぐる試論」(『へるん』47号)など。

北村 卓 (Takashi KITAMURA)

大阪大学大学院言語文化研究科教授。日本フランス語フランス文学会関西支部長。主たる専門分野はフランス文学、比較文学・比較文化など。近年では、ボードレールを中心とするフランス文学の日本における受容や、宝塚歌劇など日本の消費文化におけるフランスイメージの生成を研究対象としている。今回のシンポジウムのテーマに関係する研究としては、「谷崎潤一郎とボードレール—谷崎訳8篇のボードレールの散文詩をめぐる」(1999)、「阿部良雄と日本におけるボードレールの受容」(2011)、「荷風、谷崎、芥川におけるボードレールの創造的受容」(2014)など。

中島 淑恵 (Toshié NAKAJIMA)

富山大学人文学部教授。富山大学ヘルン(小泉八雲)研究会メンバー。ここ数年来、フランスにおけるラフカディオ・ハーンラフカディオ・ハーンの受容とハーンハーンにおけるフランス文学の影響について関心を抱いている。近年の関連著作として、「パリの同時代人におけるラフカディオ・ハーンラフカディオ・ハーンの受容、ベル・エポックの文学的ジャポニスムについての一考察」(仏語)などがある。